

いわゆる“ドイツ医学”について

中 川 米 造

日本の近代医学は、ドイツ医学の「移植」から始まったといわれる。隠喩としての移植とはいかなる作用を日本医学におよぼしているか。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、医学の先進国は確かにドイツであった。多くの国から医学を学びにドイツに人々が集まった。しかし、ほとんどの国では、持ちかえったドイツ医学の方法は、その国の医学に同化されわざわざドイツ医学とラベルをうたれたことはない。日本では、そのラベルはいつまでも保たれている上に、まがいもののラベルさえ開発、使用する（ムン・テラ、グルンド、カルテ等の日本製のドイツ語的学術語^{シニキルゴ}）。日本におけるドイツ医学の移植は神語である。

神語の呪縛から脱れるためには、日本においてドイツ医学としてうけとったものが何であったのかを、歴史的に再検討する必要がある。

ドイツ医学の一つの側面は、自然科学的方法論の強調にある。一九世紀末に、ドイツの大学医学部の進学課程を、従来のような人文主義的教育を踏襲するか、あるいは自然科学を主としたものにするかについての論議がおこなわれた結果、後者が優位にたつが、論争がおこなわれたということは、反対意見もはっきり意識されたということでもある。その過程を経ずに、いきなり自然科学モデルを導入したのが日本医学であろう。

ドイツの大学の特質は、教育・学習・研究に選択の自由のあることである。とくに自主的学習態度を培養するためには選択の自由が重要である。日本の大学、とくに医学部では選択の自由がはなはだすくない。カリキュラムの強直はドイツ医学にモデルを求めることは困難であると思われるが、ドイツ医学を摂取するに際して、軍医を教師として招きたいという明治政府の要請に注目し、ドイツ軍医教育に焦点をあてれば、その謎はある程度解明できると思われる。ドイツの軍医養成機関ペビニエールのカリキュラムを、東京医学校のそれと対比してみたい。

（大阪大学医学部衛生学教室）